

「ひだるき」騒擾の社会思想的意義

富岡勉

目次

- 一、ひだるき」騒擾の概略
- 二、騒擾の処置
- 三、騒擾の動機の考察
- 四、社会思想的意義

一、「ひだるき」騒擾の概略

江戸時代の騒擾を研究した資料は、数多くものにされているが、その大部分は農民一揆を中心としたもので、都市騒擾を取扱ったものは比較的少いようである。それは発生件数から見ても比例していよう。青木虹二氏「百姓一揆の年次的研究」によると、二九六七件が百姓一揆の件数として記録され、さらに日本思想史大系「民衆運動の思想」の安丸良夫氏の記事によれば、この上都市騒擾三八〇件、村方騒動九九〇件、併せて四、〇〇〇件を超えるとされている。この町方の騒擾の中、その戦術が奇抜であったものの一つとして、金沢における「ひだるき」騒擾が取扱れよう。そのため単行本として勝尾金弥氏がフイクションとして扱ったり、地方紙が文芸文化欄に記事として扱っている。^(註一)この騒擾を社会思想的には、どのような意義をもつものとして考えられるか、幕末期における前田藩の、幕藩

体制崩壊に、どう関係していたかを考察してみたいと思うのである。

ここで取扱う「ひだるき」騒擾とは、どのような騒擾であったかを、まず見よう。加賀藩史料の安政五年（西暦一八五八）七月十一日の項に、「見聞袋群斗記」として、

七月十一日、是夜貧民城東向山に集り叫号、予其夜泊り番なり、其声近く聞え、御横目足輕見分言上する。^(註二)

と記され、また「近山仙人之操言」には、

七月十一日之終夜すがら二千人数り、御城の向ひ山庚申塚之辺に登りて、君上之御聴に入り奉り候様、又御城下中にも響き渡る様に、ひだるきとて女童迄泣き叫び……^(註三)

と記録されており、「公私日記」にも、

七月十二日

一、昨夜向山へ宵より人多に集り、声を揚居候処、夜半過退散、其内千代屋久平方へ罷越、石杯を以蒔等少々打毀し、大正持屋五兵衛方へも罷越候得共、同所に而は打毀候等無之旨、御横目町奉行より追々言上有之。^(註四)

と記されている。これからみると、二千人余の群衆が、金沢城東方にある向山に夕刻から集合し、一斉に「ひだるき」と夜半まで、シュプレヒコールを続けたのである。「ひだるき」とは、

身体がだるいという意味で、米価高騰のため、零細庶民には購入が困難となり、空腹のために、身体に力が入らずだるいという意味と解せられよう。集合した者は男子のみならず、「女童迄泣叫び」とある如く、婦女子や子供までも動員されたことになる。そしてシュプレヒコールという特殊な戦術を採ったことである。これはまた、翌七月十二日にも、前日程の人数ではなかったが、再び続けられ、町奉行からの役人が差向けられたこと^(註五)によって、おさまった模様である。

この騒擾は、金沢城下のみで終らず、野火の広がる如く、前田藩統治下の各所に伝わって行った。七月十五日には石川郡鶴来に、百姓一揆の性格を帯びて発生し、遂には武装された一団にまで発展している。すなわち、

昨夜鶴来町^(註六)に何方之者に候哉大勢罷越、同所白山屋太右衛門等家打毀候。

と「鶴来文書」に記され、「大鋸氏蔵書」にも、同様の記事が掲載されているほか、先の近山仙人之操言にも、

石川郡鶴来村に、七月十五日之夜 能美郡山入り村々之者ども党を結び、数百人猪を獵する鎗など手に手に携へ来りて、批商人之家福有之者之家を打毀ちたり。^(註七)

と記していることからみると、何れも金持ちや米穀商が襲われている。また同じ記録の中に、

越中は高岡・永見・放生津・井波・福光は打毀ちたり。……今石動も騒しきよしなれど、……戸出・中田・福野などは竹之筒を吹き、ひだるきとて叫びしよし。夫より能州所口・子浦・宇出津・松波なども騒しかど、役人罷出召捕り又はさとし、打毀しは不致静りたるよし。^(註八)

とある。各所に騒擾が拡大され、その行為も武装された上、さらに単なる烏合の集ではなく、誰か統率者が出て組織化し、指揮を戦術的に振ったようである。同じ近山仙人之操言に、

此内大処は千人余、小所は四・五百人党を結び押来り、斧鉞などは申に不及、鉄炮・鎗など携へ来り、富有之者且又米穀批商之家并に諸道具茂微塵に打毀し、其すさまじき事はいふもさらなり。千人なれば千人半面を墨に而塗り、又はしろきものに而合ひ印など付け、手組手配りを極め、大鼓・拍子木を以進退之懸け引いたし打毀したり。^(註九)

とあり、さらに騒擾が二十日余続いたことが、

輪島は八月二日之夜四五軒打毀ちたり。如此之事は、御国初以来二百五十年之間に未曾有之変事に而、今一際甚敷騒立治り兼候へば一揆といふ程之事なり。されど其後は治りたり。誠に容易ならざる事にて、可恐又可歎事也。^(註十)

と記していることから判る。

このように、婦女子や児童をも含めた動員をもって、金沢城を見下ろすことの出来る向山という高所から、城中の藩主に聞えるようにということとでなく、城下の人々の耳にも響き達するように、夜の静寂を見計らって、シュプレヒコールを続けた。真に機智に富んだ戦術は、遂に組織化された武装集団に発展し、約二十日間、加賀・越中・能登と拡大され、台風の如く吹き過ぎたのである。

(註一) 勝尾金弥「安政五年七月十一日」北国新聞昭和四十五年十二月七日夕刊「加能女人系」

(註二) 加賀藩史料 幕末篇 上巻 九七〇頁

(註三) 加賀前掲書 九七一頁

- (註四) 加賀前掲書 九七一頁
- (註五) 加賀前掲書 九七一頁
- (註六) 加賀前掲書 九七八頁
- (註七) 加賀前掲書 九七一頁
- (註八) 加賀前掲書 九七一頁
- (註九) 加賀前掲書 九七一頁
- (註十) 加賀前掲書 九七一、二頁

二、騒擾の処置

このような騒擾に当って、前田藩の当事者はどうしていたであろうか。米価が高騰し、一般零細庶民の生活を圧迫していることは、当事者も既に察知し、処置を施すよう手配していたことは伺える。郡部へは粃五千俵、金沢の町へは蔵米百六十石、近郊へは同じく二百四十石を配給しようとし、家老奥村河内守が申し渡している。^(註二)

七月十一日に奥村河内守から申し渡したのであるが、これも間に合わず、その夜から騒擾が勃発し、翌十二日には放出量をさらに増加した処置をしている。すなわち、

〔御用方手留〕

七月十二日

一、御勝手方に而左之伺書等、今夕次而岡嶋左膳上之候処、追付被返下、伺之通被仰出候付、町奉行等々申渡。右は昨日別除粃之内、夫々被下方も有之候へ共、米価昨日之処に而は百三十銅にも相成候旨に而、夜前数百人登山騒立候趣等、今朝御用番・御勝手方河内守兩人に、町奉行二人共別席に而段々申聞之趣有之に付早速御算用場奉行にも遂

僉議候上伺候儀に候。右一件に付、御用番に改方御横目より達之趣も有之、各退出も暮比に相成候事(百三十銅は一升の市価なり)。米価高値に付世上騒立候趣、町奉行段々申聞、指当批屋共は可相渡米無之に付、御蔵米之内御渡有之様段々申聞候、石数之儀は、町奉行に於ても見留は無御座候へ共、先百拾文計之押直段に申渡候へば、少し買進之人可有之と取図、明日より二・三百石程御渡之事に相成候様申聞候へ共、御算用場においては、指当御蔵米之内、五百石ならでは難相渡旨申聞候付、猶又町奉行僉議仕候処、蔵宿印紙之内千石計借入申候はば可然旨申聞候に付、先指当前段五百石相渡、印紙借入之儀も町奉行申聞之通可申渡哉と示談仕候に付、此段奉伺候、以上。

七月十二日

奥村河内守

一、右之通りに候処、直段は重而町奉行より翌日達之趣有之、百銅に申渡。^(註三)

と、加賀藩史料に記載されている。一升百三十文の市価を、蔵米放出によって百文の公定価格に引下げようとしたのである。さらに、蔵米の不足のため、蔵宿印紙の借入れによって、當場を切抜けようとしたのである。

一応人心安定の手を打ったが、問題は二つ残っている。その第一は、当局としてこの騒擾勃発に対する責任を、誰が負うかということと、その第二は、騒擾を起した張本人の処罰である。まず最初の当局者の責任問題であるが、単にシュプレヒコールでなく、藩主に対する強訴の性格があり、さらに打毀しが付随したことである。強訴の性格とは、藩主に聞えるよう、加賀藩が一番気にしていた向山という、城を見るすことの出来

る高台から、シュプレヒコールを続けたばかりでなく、その叫び声に混えて、藩主の名を呼んでいるからである。すなわち、
 諸而十一日之夜泣叫びしは、御上々奉願心にや、御執政之名迄呼はりたり。^(註三)

と近山仙人之操言は記している。

騒擾勃発の責任は、治安当局か、米を取扱う施政当局か、ということが問題であった。いわゆる町奉行の責任か、算用場奉行の責任か、ということである。両奉行の責任の押着け合いのあったらしいことも伺えるが、結局は町奉行の免職ということになった。

七月十九日

一、今度町方騒立候一件等心附之儀も無之哉与、御算用場奉行に相尋候処、元来町奉行岡田太郎兵衛儀取捌方不宜下々色々申立候儀も有之駄。御仁政有之候而も、下々迄通し兼候。既今度米価高貴に付、格別之御取扱有之ながら、太郎兵衛手前之儀はさんざんに申ふらし、明日より之用米手当無之旨、あまり過急之儀之旨等段々申聞候趣有之。町同心之内山田新左衛門儀も取扱方不宜相聞候旨申聞候に付、隼人并新左衛門儀役儀御免可被成哉之旨申上候処、僉議之通可被仰付旨被仰出。^(註四)

と「御観翰帳之内書」に記され、町奉行岡田太郎兵衛に、真に風当たりが強い。もっとも後に記すが、近山仙人之操言の方は、町奉行に同情的であって、算用場奉行の不手際を責めている。そして御用方手留では、岡田太郎兵衛と同役の荒木津太夫も免職の処分を受けている。^(註五)一応、町奉行の引責ということで、治安当局が責を負い、当局の側の処置は落着いたのである。

騒擾を起し、不服従の行動をとった張本人達の処分はどうであったか、ということ調べてみよう。「ひだるき」というシュプレヒコールのみでなく、藩主中納言の名を呼んで強訴したこと、打毀しを行ったことは、騒乱罪という今日の罪に相当するかは別として、嚴罰の対象となったことは事実である。公事場懷秘要略に公事場奉行、すなわち、前田藩の最高裁判所々長に当る富田織人の手記によると、翌年の二月二十四日に、取調べに基く処刑について議せられ、死刑に相当するとされている。張本人として名の上っているのは七人として、金沢地方では義民扱いをしたらしいが、加賀藩史料では、五名の名が記されている。何れも次の様な極刑を受けている。^(註七)

| | | | |
|--------|---------|------|-------|
| 刎首之上梟首 | 八幡町 | 原屋 | 善兵衛 |
| 同 断 | 同 所 | 能美屋 | 与兵衛 |
| 同 断 | 同 町 | 越中屋 | 宇兵衛 |
| 同 断 | 春日町三丁目 | 北市屋市 | 右衛門 |
| 刎首之上梟首 | 八幡町河原市屋 | 文次郎方 | に便罷在候 |
| | 河北郡河原市村 | | |

頭振文左衛門

彼等の刑執行は四月十三日であった。また鶴来の騒擾の張本人とされた五名は、九月十八日に磔の刑に処せられている。^(註六)なお当時の姓名の屋号は、出身地をとったようである。北市屋市右衛門等七名は、安政義民として、一般庶民から尊ばれ、胸に稲を抱いた七体の地蔵に祭られ、金沢市観音町の寿経寺に安置されている。

(註二) 加賀藩史料幕末篇 上巻 九七〇頁

(註三) 加賀前掲書 九七六、七頁

- (註三) 加賀前掲書 九七五頁
- (註四) 加賀前掲書 九八〇頁
- (註五) 加賀前掲書 九七九頁
- (註六) 加賀前掲書 一〇三九頁
- (註七) 加賀前掲書 一〇五〇頁
- (註八) 加賀前掲書 一〇七七頁

三、騒擾の動機の考察

この騒擾の動機が、米価の高騰にあったことは事実であるが、何故、騒擾が起る程米価が高騰したか。この動機を探りながら、「ひだるき」騒擾の意義を求めてみたい。百姓一揆の研究は数多く行われ、その原因の多くは過酷な年貢の取立てや、土地境界の争い、あるいはその決裁に対する不服、などが多かった。例えば、愛知県稲武村の、文化六年（一八〇九）の安石代要求^(註一)、あるいは天保十五年（一八四四）から弘化三年（一八四六）にかけて行われた、足助村とその周辺の百姓との、荷の口銭をめぐる争い^(註二) などがある。都市騒擾は大低の場合、零細庶民の生活脅威が原因となることが多い。底辺階級のエネルギーの爆発である。「ひだるき」騒擾も、米価高騰による生活の脅威から生じたことは、既に明らかである。米価高騰には自然力による原因と、人為的な社会的・経済的原因とを考えることが出来る。

まず自然力による原因として、気候や天変地異を掲げることが出来る。凶作不作や地震・洪水・害虫などである。安政五年（一八五八）も天候による不作であった。先にあげた近山仙人の操言も、梅雨の頃から土曜にかけて、霖雨が続いたので、米商人が凶作と見込み、米の売惜しみを始めたので、騰貴が生

じたことを記載している。^(註三)

丁度、七月は新歴の八月または九月初旬に当る。現在のよう
に稲種の改良も行われていなかったから、早場米もなく、端境
期で米のなくなる時期であり、梅雨明けの時節である。町人と
して身分の認められている本町町人にとっては、定収入もあっ
て、米価の騰貴も、苦しいことは苦しくても、一家が飢餓にう
える程ではなかったかもしれないが、農村から流れ込んだ日稼
人達は、町人と見なされていない存在で、相對請地をもとにし
て町に発展していった向山の山すそに住み、零細庶民として、
大衆免町を作り上げ、長雨続きの場合は日稼の仕事がないた
め、収入が殆んどなかったわけである。相對請地に零細庶民の
多い理由は次のようなものである。金沢城下町が安定してくる
と、武士は定着して奉公人を農村に求め、また本町町人も奉公
人を農村に求めた。下層農民は農業を捨てて、町へ奉公に出る
ようになった。封建収奪の根源である農村から、農民が減少す
ることは、藩財政からも困ることになるので、離農を禁ずる申
し渡しは度々出されたようであるが、農民生活より楽な都会生
活にあこがれ、先輩の奉公人をたよって離農するものが多かつ
た。また奉公人達も年奉公が終っても、過酷な年貢に苦しむ
よりも、都市に住み着こうとして、帰農するものが殆んどなか
った。彼等は都市に定着する一つのよい方法を選んだ。それは
武士や町人の所有で近郊にある土地を、賃貸契約して、その土
地に定着する方法であった。武士や町人もその土地からの収入
があるので、彼等と賃貸契約を結んだのである。これが相對請
地であって、農地売買が許されなかったもので、個人的な貸借関
係を結ぶことによって、都市に定着したのである。従って相對

請地には零細な日稼人が多かった。大衆免は約五〇％が相對請地であつて、頭振と稱する水呑百姓に相等するものが一一〇軒もあるという貧乏村で、町建てされた所も、全戸数二四二軒の内、日稼人が一〇〇軒あつたと言われている程の、下層底辺町民の集中している土地であつた。

同じ向山の周辺であつても、春日町は地子町と稱し、大衆免よりは本町に近い取扱ひを受けていた。春日町はやはり相對請地から發展した町であるけれども、本来の城下町の本町に近い程度に發展したので、本町に近い扱ひを受ける地子町となつていたので、この町は日稼人も三〇軒で、大衆免に比べると三分の一程度である。大衆免や春日町の人達が、向山に集合した集團の中心であつたらしい。彼等日稼人の多くは、一日の収入が約二〇〇文で、それも長雨となると屋根葺などの仕事が出来ず、手伝職もなく収入が減少した。一方米価は普通五〇（一升当）文程度であつたので、平均五人家族でやっとの暮しである。それが一升百三十文になると、五人で一日一升五合の米が必要とすれば、米代文で百九十文から二百文となり、味噌や塩などを買うことさえ出来ないし、まして衣類のつづくり用の布を買うことなどは、及びもつかないことである。これも二百文の収入のある者についてであつて、長雨による収入がなければ、粥をすることすら出来ないわけである。此処に底辺にあれば、零細庶民が、肌をもつて生活の脅威を感じとり、前田藩の政策に珍しい形をもつて、不服従の表現をしたものと受取れる。

經濟政策の不備であることは、幕藩体制の末期的官僚制の動脈硬化現象と受取れる。端境期に米価が不安定となり、零細庶

民に生活の不安を感じしめることは、需要と供給の關係から、為政者は長年の経験によつて、よく判っている筈である。しかし強権発動によつて過酷に年貢を取立てることに慣れ、天保の改革によつて、さらに實質的にこれを強化し、庶民の人間性を考えなかつた所に、官僚組織の欠陥があり、これがやがて幕藩体制崩壊の一因ともなるのである。

上質屋日家栄帳に、嘉永七年（一八五四）寅七月廿三日夜の記事として、次のように記されている。

町年寄（宮腰）酒屋八右衛門浦御に錢取立役并勘定方役平木屋源七郎両家、夜四つ時より八つ時迄に大勢して前口こわし大混雑仕。……誠に不思議と申は、百年此方にケ様之混雑兩三度と申事に御座候得共、皆七月廿三日と申事。左候はば人間之わざとは見え、外道と歎之勢と申事。

これからみれば、午後十時頃から翌午前二時頃にかけて、現在の金石で打毀しがあつたわけである。この筆者は今までも七月二十三日に数回起つてゐることを注視し、外道かもしれないが、人間の文化や生活宗教の度合からみれば、止むを得ない観方であるかもしれない。七月二十三日は偶然の一致かもしれないが、六月七月八月に騒擾の多いことは注目すべきであろう。嘉永元年（一八四八）七月二十一日に越中富山城下で騒擾があり、嘉永四年（一八五一）七月朔日には、不穩の様子が伺えたからである。緊急に夜中に、窮民に米穀を賑給することが議せられ、嘉永七年即ち安政元年に、七月二十三日、今記した金石での打毀しが起つてゐる。さらに歴史を追えば、安政五年（一八五八）七月十一日から八月二日にわたる「ひだるき」騒擾、続いて慶

応元年（一八六四）六月五日に、金沢小立野の米仲買越中屋喜兵衛が襲撃されている。ただ時期的に例外ではあるが、非常に規模の大きい騒擾が、明治二年（一八六九）十月十二日に、富山の越中新川郡で農民等が、凶作が原因で騒擾を起し暴動となり、これに二万人の民衆が参加したらしく、十一月四日には、これを鎮圧するため武装兵力三百七十余名が出動し、鎮圧に出張した役人の後藤喜兵衛という少属が、自害し果てている。この例外を除いて他は、端境期に当たっている。

このように自然的拘束としての米穀の流通の不円滑が一つの原因と考えられるが、さらに前田藩の官僚制による組織の拘束に基く、米穀流通の不円滑のあったことも、見逃し得ない騒擾勃発原因の一つでなからうか。先に「ひだるき」騒擾勃発の責任者として、治安当局の町奉行が職を免ぜられた際、算用場奉行との責任の問題があったように記したが、町奉行が算用場奉行に相談もしなかった、という感情的なもの、官僚的縄張り根性があったとも思われる。しかしこれについては、先に若干記したけれども、近山仙人之操言では、算用場奉行に対しては批判的であり、むしろ町奉行に同情的である。すなわち

一、右騒ぎ立し来因は、御算用場奉行之御米之不取捌故なり。^(註九)

と述べ、従来は十二月十日に年貢米を勘定し、藩主も夜中になっても、その報告が来るのを待っていたほどであったが、このやり方が次第に崩れ、算用場奉行の官僚的处理のため、翌年の二月頃に年貢米の報告がなされるようになり、非常米や大阪への廻米の手配も遅れることとなり、大阪での米の換金も遅くなつて、家中の台所も苦しくなることもあったらしく、加えて仲

買業者の暗躍、商人の買占めなどによって、米穀の流通が不円滑になったこともある。近山仙人之操言は、大阪方面に多くの米を廻したり、酒米に廻し過ぎるようなことを非難し、算用場奉行の政策の不適當を指適^(註十)しているが、これは前田藩財政の幕藩体制末期の症状のやりくりから出た、算用場奉行の苦肉の策であるとみられよう。幕末期の各藩の窮乏状態と同様、前田藩も例にたがわず、大阪の米問屋などに、相等な借金を負っていたことと思われる。従って借財の担保として相当量の米穀を大阪に廻さざるを得なかったり、藩財政のやりくりの必要上、換金を急ぐため、大量の米穀を廻さざるを得なかったと思われる。

近山仙人之操言では、難波（大阪）の方が地元より安価なことに、不満を示しているが、地元で米穀の売れる量は知れたものである。前田藩に揚る年貢米の大部分を、直ちに地元で換金出来れば問題はないが、地元にはそれ丈の能力がないから、地元よりも安価であっても、換金能力の大きい大阪に、算用場奉行としても頼らざるを得なかったわけである。藩内の庶民の生活よりも、藩財政維持のための、年貢米の換金化の方が優先したのである。此処に幕藩体制の未期的症状と共に、官僚組織の硬直化現象が見られると言うべきであろう。

是に而三ヶ国之人を可飽も可飢も、御算用場奉行之手にある事可知なり。若し三州之人可飽可飢は町奉行之手に而、彼之奉行之手にあらざる事ならば、泣き叫びしとて狼狽いたし、津留やら堂形非常御手米相渡候など、其外他国米買入にも不及、泰然と取捌も可有之处、狼狽は如何なる事ぞや。是等に而三ヶ国之人民可飽可飢も、御算用場奉行之手にある事可知事也与いひ証というべし。^(註十二)

と近山仙人之操言が記しているのも、興味のある所である。

- (註 一) 布川清司「農民騷擾の思想的的研究」第一部
- (註 二) 布川清司 前掲書第三部
- (註 三) 加賀前掲書 九七一頁
- (註 四) 田中嘉男「城下町金沢」二〇一頁
- (註 五) 加賀前掲書 六二六頁
- (註 六) 加賀前掲書 五六頁
- (註 七) 加賀前掲書 二九五頁
- (註 八) 加賀前掲書 九七九頁
- (註 九) 加賀前掲書 九七二頁
- (註 十) 加賀前掲書 九七三頁
- (註 十一) 加賀前掲書 九七四頁
- (註 十二) 加賀前掲書 九七六頁

四、社会思想的意義

下出積与氏の「石川の歴史」によれば、寛文六年（一六六六）から安政五年（一八五八）の約二〇〇年間に、前田藩で発生した一揆や騷擾は五一回で、この中「ひだるき」騷から各地に飛火したものが九回あり、これが安政五年に集中し、発生地も金沢・小松・大聖寺・宮腰に集中していることになる。幕末期に回数が増えていることは、外国船の渡来と相まって、庶民に旧体制による生活の不安感を幕藩体制が与え、官僚組織への不服従と、官僚組織の拘束からの脱出を、肌で感じたものを行動に現わしたと見ることは出来ないか。

彼等はフランス革命やロシア革命の如く、組織をもち、政治的要求を掲げて、行動するようには訓練されていなかったし、

社会思想的にもそれ程進歩していなかった。彼等は政治参加の要求もせず、単に幕藩体制の枠内での要求であったが、これは理由のあることである。

理由の第一は、余りも幕藩体制下の身分制度の重圧が大きかった、ということである。底辺の人間として、零細庶民としての身分から、町人や家持となることは容易でなかった。親子代々夫々の身分に甘んじた生活をせねばならなかった。服装その他も嚴重に規正された中で、この拘束を打破して躍起することは、死を意味することでもあった。日稼人の北市屋市右衛門も、水吞百姓で日稼人となっていた頭振文左衛門も、髪結床の主人能美屋与兵衛も、文字通り死罪となった。餓死しても身分に甘んじることが、庶民の生きる途であった。彼等の訴えを、各階級に展開するような体制ではなかった、ということである。

第二は政治的専門知識を持ち得る状態になかった、ということである。零細庶民は文盲の者が大部分で、せいぜい寺小屋での読み書きソロバンである。武士階級の如く学問を受けてはいなかったし、受けることも許されなかった。能登沖や金石沖に外国船の来航があつて、世の中の情勢の変化には何か感じていたであろうが、幕藩体制がゆらいでいる政治情勢について、深く知り知識を持ち合すことは、若干のことは口伝えによって知り得ても、専門知識として把握することは、出来ない状態であった。

第三は、彼等の騷擾は地域的なもので、ナショナルなものにはならず、況んやインタナショナルではないことである。全国的な革命やその運動形態にはなり得なかったのである。藩政であったので、各藩毎に自藩の政策を振っていたから、騷擾

が政治的性格を帯び、藩政を批判する全国的規模には、発展することが困難であった。お上を批判することは、到底出来ない状態におかれていた。

このような状態に、ガッチリと押えられていたので、彼等の要求は身分制度の中で、経済的要求からの騒擾にならざるを得ず、社会的価値の転倒や、政治への参加要求、幕藩体制の否定などは、おおよそ考えにも及ばなかったところである。しかし、打毀し、武装集団、組織的出所進退、藩主名の呼号、というようなことは、その底流に政治に対する不信を、組織の拘束に対する不服従を、彼等なりに精一杯表現したものではなかったか。指導者や張本人が、犠牲となって死罪に処せられても、次から次へと新しの張本人や指導者が出るということは、彼等の不安感や不服従の蓄積されたエネルギーが、そうさせて、直接的ではなかったが、一步一步、幕藩体制の崩壊の方向に持っていたと評価すべきであろう。このような意味から、「ひだるき」騒擾は、前田藩の封建的性格を後退させる、一つの契機であったと言える。彼等は、前田藩の政治に直接参加することを望んだのではない。より豊かな社会の実現を要求したのでない。ただひたすらに、現状の生活維持という、極めて小さい願いをしたのである。

彼等の願いが消極的であったことをもって、直ちに、一時的経済要求にすぎないと、簡単に見過してよいことであろうか。消極的であったことは、彼等の不服従が潜行していると解することは許されないだろうか。彼等底辺にあえぐ零細庶民の生活意識の底流に、幕藩体制に対する怨念的な感情が、潜在するようになって行ったと見ることは出来ないだろうか。農民一揆の

場合は、「お百姓様」と自らを呼ぶことによって、現体制の批判的態度や身分制度への不服従を表現したり「世直し」とか、「ええじゃないか」という言辞をもって、彼等の社会思想的批判を表現したけれども、都市騒擾である「ひだるき」騒擾においては、中納言の名を呼号することや、打毀しに表現を見ることが出来、郡部における武装と統制ある集団行動に何うことが出来る。これらのエネルギーが、前田藩においては相對請地に温存されていたのである。前田藩の金沢城下町として、郊外に発展した相對請地という特殊制度が、幕藩体制をゆるがす根拠地であった所に、「ひだるき」騒擾はプロレタリア的性格を求めることが出来るであろう。

前田藩という官僚組織の非人間性ということを先に述べたが、その組織の中にあっても、個人的には人間尊重の思想の持主は、多くあったことと思われるが、一度組織に編入されると、個人の意思ではどうにもならないのが官僚制の特長である。近山仙人之操言も、至って表現は人間性に富んだものを持っていると共に、この表現から我々は、社会の情勢が次第に幕藩体制優先から、人間性尊重の方に移行しつつある気配が養われて来ていたのではないか、と推察出来るのである。すなわち、

尤町人も御国民なれば、可惡筋聊茂なけれども姦計にて利を得、下々難儀する場々至るは、御国家之害になるなり。^(註三)

と記しているのである。安政五年頃の金沢城下の人口は約四万と言われているが、その約五%の民衆が導火線となって、前田藩治下の加賀・越中・能登の三国を、二十日間に渡ってゆり動かし、治安当局に引責せしめたこの騒擾は、幕藩体制を後退さ

せる間接的な力であったと見るべきではなからうか。

(註二) 下出積与 「石川の歴史」 一九〇頁

(註三) 加賀前掲書 九七四頁

参考文献及資料

加賀藩史料

石川県図書館協会「加賀志徴」上・下

蔵並省自「江戸時代の支配と生活」

田中嘉男「城下町金沢」

布川清司「農民騒擾の思想史的研究」

原田伴彦「日本町人道」

「民衆運動の思想」(日本思想史大系)

若林喜三郎「石川県の歴史」

勝尾金弥「安政五年七月十一日」

下出積与「石川の歴史」

青木虹二「百姓一揆の年次的研究」